# 高啓「尋胡隠君」詩小考

## ―「春風江上路」の「上」と「看花」の「花」の解釈をめぐって―

渡部英喜

### はじめに

「春風江上路」とは明の高啓（一三三二～一三七〇）の詠った「尋胡隠君＝胡隠君を尋ぬ」と題する五言絶句の転句であるが、この句の「江上の路」の「上」をどのように解釈すべきあるか、久しく迷っていた。暫くは理解することができないまま、ただいたずらに時を費やしていただけであった。また、承句の「看花」の「花」はどんな花を指しているのであろうか。これも理解できないままに時間を経てしまったのである。この「上」と「花」の二点について、諸家の解釈した書籍を拠り所にして私見を述べてみたい。

### 一、諸家の訳し方は

初めに、高啓の「尋胡隠君」詩を掲載しておく。

尋胡隠君（胡隠君を尋ぬ）

渡水復渡水　水を渡り復た水を渡る
看花還看花　花を看還た花を看る
春風江上路　春風江上の路
不覚到君家　覚えず君が家に到る

（五言絶句・下平声六麻の韻）

先ずは諸家の著した書籍を発行順に並べ、その解釈を掲載しておきたい。では、初めに、内田泉之助博士の『漢詩百選』（明治書院・一九六二年六月発行）には、

1幾たびか川を渡り次々と花を見ながら、春風のそよぐ水辺の路をたどるうちに、いつとは知らず、君が家についてしまった。

と訳している。続いて、前野直彬・石川忠久編『漢詩の解釈と鑑賞事典』（旺文社・一九七九年三月発行）では、

2川を渡り、また川を渡り、
花を見、また花を見ながら、
春風の吹く川沿いの路を、
いつのまにやら君の家に来てしまった。

とあり、松枝茂夫編『中国名詩選　下』（岩波文庫・一九八六年十月発行）には、

3水を渡り、また水を渡り、花をながめ、さらに花をながめ、
春風にふかれつつ河沿いの路を行ったら、いつのまかあなたのお宅に着いていました。

とあり、拙著『長江漢詩紀行』（昭和堂・一九八六年十二月発行）では、

4川を渡り　また　川を渡る
花を眺め　また　花を眺める
春風の　そよふく川ぞいの道
いつのまにか　きみの家に　到る

と訳した。『研究資料漢文学5　詩3』（明治書院・一九九三年一月発行）で、宇野直人氏は次のように訳している。

5川を渡り、また川を渡り、
花を見、また花を見て、
春風の吹く川ぞいの路を歩くうち、
いつの間にかあなたの家についた。

とあり、拙著『漢詩百人一首』（新潮選書・一九九五年四月発行）には、

6川を渡り、また川を渡る。花を見ながら、さらにまた花を見る。
春風がそよぐ川べりの道を歩いているうちに、いつのまにか、
君の家にたどり着いてしまった。

と解釈している。次に、石川忠久先生の『春の詩一〇〇選』（日本放送出版協会・一九九六年三月発行）には、

7川を渡り、また川を渡り、
花を見、また花を見て、
春風そよぐ川ぞいの路を歩くうち、
いつの間にか、あなたの家につきました。

とある。次いで、志賀一朗先生の『漢詩の鑑賞と吟詠』（あじあブックス・大修館書店・二〇〇一年六月発行）には、現代語訳として、

8川を渡り、また川を渡り、花を見、また花を見ながら、春風
の吹く川沿いの路を、何時の間にか、君の家に来てしまった。

と解釈している。また、詩中の「花」の語釈には、「桃の花であろうが、外に海棠、李、梨、杏なども考えられる。早春ならば梅の花かも知れない」と書いている。花の解釈について、具体的に触れている諸本は少ないように思われるが、後で触れる竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』（岩波書店・二〇〇六年五月発行）には「桃の花」と記している。

次は、松苓会の大先輩である故佐藤美次氏の著した『日・中漢詩林そぞろ歩き』（胆江日日新聞社刊・二〇〇一年七月発行）には、

9川をこえ、また川をこえ、
花を眺め、更に花を眺める。
そのようにして春風に吹かれながら
知らぬ間に君の家に着いていた。

では、先にも触れた竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』（岩波書店・二〇〇六年五月発行）は、

10舟にのって渡し場を渡り、少し歩いて、また渡し場を渡って、
やってきました。途中、くれないの桃の花を見、それを見お
わッて歩くと、また桃の花が咲いていて、それを見たのです。
春風に吹かれて、舟にのったり、桃の花を見たりして河ぞい
の道を歩いてきたのです。あまりの気分のよさに、疲れもし
らず、気がつくとあなたの家でした。

とあり、石川忠久編『漢詩鑑賞事典』（講談社学術文庫・二〇〇九年三月）には、

11川を渡り、また川を渡り、
花を見、また花を見ながら、
春風の吹く川沿いの路を、
いつのまにやら君の家に来てしまった。

とあり、2の『漢詩の解釈と鑑賞事典』（旺文社）と同じ口語訳がなされている。続いて、新潮選書を大幅に書き改めた拙著『心にとどく漢詩百人一首』（亜紀書房・二〇一〇年四月発行）では、

12川を渡り　また川を渡る
花を見　また花を見る
春風がそよぐ川面を　小舟で進んでいるうちに
いつのまにか　君の家にたどりついてしまった

と訳した。つまり、江上を「川の上」という訳を試みたのである。10の解釈にも舟が出てくるが、転句の「江上の路」を「河ぞいの道」と訳している。

次に、石川忠久先生が編集をされている『聞いて楽しむ漢詩１００選択』（ＮＨＫ出版・二〇一一年一月発行）には、

13川を渡り、また川を渡り、
花を眺め、また花を眺めて、
春風の吹く川ぞいの路を歩くうち、
いつの間にか、あなたの家につきました。

とある。以上十三冊の書籍の口語訳を引用したが、「江上の路」にはほぼ二通りに解釈がなされている。それを整理してみると、次の通りである。

「江上路」の訳を「川（河）ぞいの路」と訳しているのをA群とすると、次の通りである。

A群　1　水辺の路を
2　川沿いの路を
3　河沿いの路を
4　川ぞいの道
5　川ぞいの路を
6　川べりの道を
7　川ぞいの路を
8　川ぞいの路を
10　河ぞいの道を
11　川沿いの路を
13　かわぞいの路を

とあり、A群には十一通りの解釈があり、全体の八割以上を占めており、圧倒的な数値である。次に、B群の「川の上（川面）」と訳した例は、

B群　12　川面を　小舟で進んでいるうちに

と訳した一例を数えるのみで、全体の一割にも達していない。

以上、十三通りの口語訳を眺めてきたが、A群の訳し方が圧倒的に多いのであるが、作者の住んだ江南地方という地形を考えた場合には、果たして、「上」の訳し方が「ほとり」と解釈しても良いのであろうか。

念のために、『大漢和辞典』を繙いてみると、「江上」には1「かは

のうえ」・2「かはべ」・「かはのほとり」という意味が書かれている。また、『大漢語大詞典』の「江上」の項には1「江岸上」・2「江面上」・3「江中」という意味がある。「尋胡隠君」詩での意味は3「江中」（『大漢語大詞典』所収）を除いて、「かはのほとり」か「かはのうえ」の何れかの意味に当てはまることは間違いなかろう。

## 二、南船北馬について

「上」字には幾つかの意味が有るが、この詩の場合には「うえ」か「ほとり」の意味で考えればよい。事実、諸家の通釈でも「川のほとり」するものと、「川の上」にするものとがある。

初唐の詩人盧僎（生没年不詳）の「南楼望」と題する五言絶句の転句にも「傷心江上客＝傷心す江上の客」と詠まれている句がある。この「江上の客」を「長江を行き交う旅人」とみる説と「長江のほとりにたたずむ旅人」とみる二つの説がある。盧僎の句の場合には、この二説とも成り立つように思われるが、高啓の「江上路」の場合には二通りの解釈は成立せず、「川の上（川面）」の意味で取らなければならないように思われる。

高啓の「尋胡隠君」詩が詠まれた舞台が何処であるかということが詩のカギを握っているのである。この詩の「水を渡り復た水を渡る花を看還た花を看る」と詠う前半の二句は江南地方の春景色である。作者の高啓は長洲（蘇州）の人であり、元史の編纂や戸部右侍郎（大蔵次官）に抜擢されて、一時期、南京に居を移したこともあるが、すぐに役人生活を辞めて江南地方にある青邱（蘇州郊外）に戻っている。そう考えると、詩の詠まれた舞台は蘇州郊外が最も有力である。そうであれば江南地方の春景色が詠じられていることになる。しかし、この作品がいつ詠まれたものであるか具体的には知るよしもないが、明代第一の詩人である高啓は元末の張士誠の乱を避けて、蘇州郊外の青邱に住んだことはよく知ら知られているので蘇州と見るのが穏当であろう。

中国には「南船北馬」という四字熟語がある。その意味は「中国の南方、つまり江南地方にはクリーク（水路）が縦横に張りぐらされており、日常の移動には舟を用いる。一方、北方では山野が多く、移動は馬に乗って移動する」という意味である。中国の風土をうまく表現しているのが「南船北馬」という熟語である。

蘇州は紹興（浙江省）とともに「東洋のベニス」と称され、市街はもとより郊外にも水路（クリーク）が縦横に走っている。唐代には橋が市内には三百有余といい、マルコ・ポーロの『東方見聞録』には「石造りの橋が六千もあった」と書かれており、現在でも市内には百有余の橋が架かっている。であるから、日常の移動には舟を使って、水路を往来している。従って、転句の「江上の路」はクリークの上を舟で往来しているととるべきであろう。

## 三、花について

高啓は幾つもの小川（水路）を横切り、土手に咲く草花を眺めながら、隠者である胡君の家に訪れたのである。この花は具体的にはどんな花を指しているのであろうか。「江上路」と同じように、諸家の口語訳からそのまま抜き出してみよう。花をそのまま「花」と訳しているのをC群とすると次のようになる。

C群　1花
　　2花
　　3花
　　4花
　　5花
　　6花
　　7花

8花
9花
11花
12花
13花

とあり、花を具体的に訳しているのをD群とすると、

D群　10桃の花

である。

「花」をただ単に花と訳されているのが圧倒的に多く、全体の九十二パーセント強も占めている。また、花を具体的に「桃の花」と口語訳しているのは一例だけに過ぎない。それは竹内実編著『岩波漢詩紀行辞典』（岩波書店）だけである。但し、口語訳には「花」としているが、『漢詩の解釈と鑑賞事典』のように、解説には、「花はまずは桃花であろうが、ほかに李、杏、梨、海棠なども考えられる」としている書籍が二冊ある。花は「ただ草花ではなく樹花であろう。早春であるなら、梅の花かもしれない」と解説している書籍もある。

江南の春景色を代表する花は桃の花であることは間違いないが、胡隠君は隠者である。隠者には華やかな花でなく、隠者に相応しい花があるはずである。隠者に相応しい花は樹花ではなく、草花の方が相応しいように思われる。樹花の「梅花」の場合は北宋の林和靖の「梅妻鶴子」が強く意識されるが、この詩の場合は土手に咲く草花、つまり、菫や蒲公英の花が隠者に相応しい花なのではなかろうか。川面を舟で行くと土手のどこもかしこも野草の花が眺められる。一面に咲く野草の花を眺めながら胡隠君の家を訪ねたのであろう。

## むすび

蘇州や常熟などの江南地方にある市街やその郊外の地形を考えれば、「江上の路」はクリークを舟に乗って航行している様子が詠じられていると解釈するのが適当である。江南地方は舟を用いて航行するのが日常的であるから、胡隠君を訪ねる時に見た花は江南の春景色を代表する桃の花でも、北宋の名高い隠者に結びつく梅の花でもなく、野草の花が相応しいのである。

付記　絶句は同じ漢字を繰り返して用いないのが原則であるが、この絶句は「渡水」や「看花」のように、同じ漢字を繰り返し用いている。また、同じ意味の「復」と「還」も用いている。その上、音律上でも一見破格に見える。では、「尋胡隠君」詩の平仄式を図示してみると、

●●●●●　●仄字の漢字。
○○○○◎　○平字の漢字。
○○○●●　◎平字の韻字。
●●●○◎

となる。この絶句は起句の二字目「水」が仄字であるから、仄起式であり、韻字が平韻であるので、平仄式は次のようになる。それを図示すると、

▲●○○●　▲どちらでも可、仄字が原則。
△○▲●◎　●仄字。△どちらでも可、平字が原則。
△○○●●　○平字。
▲●●○◎　◎平字の韻字。

となる。平韻の仄起式に高啓の「胡隠君を尋ぬ」の平仄式を重ねると、起句がすべて仄字だけで構成されており、更に下三連（末尾三字が同じ平仄）になっている。また、続く、承句にも全て平字だけであり、起句と同じ様に下三連である。下三連は忌み嫌われている。従って、この絶句は音律上でも破格の構成である。つまり、前半の二句は拗句である。但し、この前半の二句はそれぞれを単独に眺めると、破格ではあるが、両句の平仄の対応の関係を眺めてみると、「拗救」の関係になっているのである。つまり、起句の三・四字が「平平」とあるべき処が「仄仄」となっている。承句の三・四字が「仄仄」となるべき処を「平平」に改めているので破格が救われているのである。

（平成二十三年一月十八日記す）